

# 岩国市海土路貝塚（中尾貝塚）採集の貝類について

沖田 紂麻

## はじめに

海土路貝塚（中尾貝塚）（以下、海土路貝塚と呼ぶ）は、岩国市海土路町に所在する貝塚遺跡である。岩国市からの依頼を受けて、ここから採集された貝資料を調査したので、その内容を報告する。

## 1. 海土路貝塚について

岩国市では、昭和20年代に平田、海土路、藤生、室木の一帯から50か所におよぶ貝塚が発見されており（岩国市史編纂委員会 1970）、海土路貝塚もそのひとつと考えられる。

貝塚は、西から東へのびる台地の南縁に立地する（図1）。貝塚から至近の海岸までは、現況で1kmほどの距離である。土器等の遺物が出土していないため、貝塚の形成時期は不明とされる<sup>1)</sup>。

## 2. 資料

資料は、海土路貝塚から採集された貝殻19点である。昭和30年代に岩国市立灘小学校のグループが採集した資料で、同小学校に保管されていたが、現在は岩国市文化財課に移管されている。

貝殻には、資料番号はふられていない。表採資料であり、出土地点や層位は不明である。

貝資料が収納されていた紙箱には、「昭和37年寄贈」と記された紙ラベルが添付される。半世紀前の採集資料であるが、保存状態は良い。



図1 海土路貝塚の位置

### 3. 方法

前処理として、竹串や筆を使用し、乾燥状態でクリーニングをおこなった。

その後、所有する現生貝の標本と図鑑を参考に種を同定した。これに並行して、人為的な痕跡等の観察と、ノギスによる計測をおこなった。

### 4. 結果

表1に示すように、腹足綱（巻貝の仲間）1科2種、二枚貝綱4科5種を同定した。内湾の砂泥底に棲息する貝が多い。

表2は、種類ごとの残存部位と数、殻長の計測値である。残存部位から算出される最小個体数は、ウミニナ1、イボウミニナ3、ハイガイ4、マガキ1、アサリ4、ハマグリ1、シオフキ1である。ただし、複数点ある二枚貝は、歯（左右殻が噛み合う蝶番の部分）の合致や左右殻のサイズからみて、同一個体かどうかを考慮した結果、最小個体数はハイガイ6、マガキ2、アサリ5となった。

また、19点の貝殻には、焼けた痕跡は認められなかった。

### 5. 考察

今回調査した資料は表採資料であり、貝層から目についた貝殻を採取したものと推測される。数も少ないため、この資料から貝塚を構成する貝相を推し量ることはできない。とはいえ、複数個採集されている貝については、貝相に占める割合が比較的高いのではないかと考えられる。海土路貝塚においてハイガイ、アサリ、イボウミニナがこれに該当する。

表1に示したように、ハイガイ、ウミニナ、イボウミニナは内湾の干潟に棲む貝であり、アサリも砂泥質の干潟に棲む（福田ほか 1992）。このことから、海土路貝塚を残した人々は、遺跡の目前に広がる広島湾の沿岸で貝採取活動をおこなったと考えられる。加えて、河口の汽水域を好むマガキやハマグリも出土することから、河川が流入する汽水環境が想定される。遺跡の所在する岩国市海土路

表1 出土した貝の種名と生息環境

腹足綱 Gastropoda			
新生腹足目	ウミニナ科	ウミニナ	内湾の干潟、潮間帯の砂泥、
Caenogastropoda	Batillariidae	<i>Batillaria multiformis</i> (Lischke,1869)	
〃	〃	イボウミニナ	やや開放的な内湾、潮間帯中部～下部、泥底、砂泥質干潟、
二枚貝綱 Bivalvia			
フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	内湾の干潟、潮間帯～水深10m、泥底、
Arcoida	Arcidae	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus,1758)	
ウグイスガイ目	イタボガキ科	マガキ	汽水性内湾、潮間帯～潮下帯、砂礫底、泥底、
Pterioda	Ostreidae	<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg,1793)	
マルスダレガイ目	マルスダレガイ科	アサリ	潮間帯中部～水深10m、砂礫泥底、
Veneroida	Veneridae	<i>Ruditapes philippinarum</i> (A. Adams & Reeve,1850)	
〃	〃	ハマグリ	潮間帯下部～水深20m、内湾、砂泥底、
〃	バカガイ科	シオフキ	潮間帯下部～水深20m、干潟、砂泥底、
Mactridae			
<i>Mactra veneriformis</i> Deshayes in Reeve, 1854			

表2 出土した貝の残存部位・数・計測値

分類名		L/R	部位	被熱	数	殻長 (mm)
腹足綱	ウミニナ	-	完全	無	1	30.3
腹足綱	イボウミニナ	-	略完	無	3	
二枚貝綱	ハイガイ	L	完全	無	4	24.3、30.9、33.1、33.9
二枚貝綱	ハイガイ	R	完全	無	2	27.3、37.6
二枚貝綱	マガキ	L	完全	無	1	
二枚貝綱	マガキ	R	完全	無	1	
二枚貝綱	アサリ	L	完全	無	1	37.8
二枚貝綱	アサリ	R	完全・殻頂部	無	4	23.5、47.6
二枚貝綱	ハマグリ	L	略完	無	1	43.4以上
二枚貝綱	シオフキ	R	略完	無	1	44.2以上

町の北東には、錦川の河口に形成された三角州が広がる。この三角州の東側大部分は近世以降の干拓と埋立であるが、西側は11世紀頃から自然に形成されはじめた（神崎・藤田2016）。海土路貝塚の形成は中世より前の可能性があるが時期は不明であり、三角州が存在していたか不明であるが、錦川の流入による汽水環境が存在したであろうし、遺跡付近の低地まで海が入り込み、小規模な入り江のような環境が存在した可能性もある。

次に、貝のサイズについてであるが、シオフキは標準的で、それ以外の貝殻はその種の平均的なサイズに比べておおむね小さめである。表採の際に、目につく大きな貝殻を採取したと想定すれば、比較的小型の個体が多い貝塚なのかも知れないが、推測の域を出ない。

### おわりに

海土路貝塚は、人工遺物の出土がなく、形成された時期がわからない貝塚である。ここで報告した資料についても、表採したときの状況が不明であるうえ、採集された貝の数が少なく、おのずと資料から引き出せる情報は限定された。貝塚の全体を把握するためには、目につく貝殻の採集だけではなく、貝層のコラムサンプルを採取し水洗選別する定量分析が有効である（小宮2015）。遺跡についてより詳細な情報を得るために、そうした方法で調査される機会が望まれる。

遺跡に関する情報が非常に少ないと考えると、今回調査した貝殻は、貝塚の実態を知ることのできる貴重な資料と言える。今後も、地域の歴史を示す資料として保管・活用されることを願う。

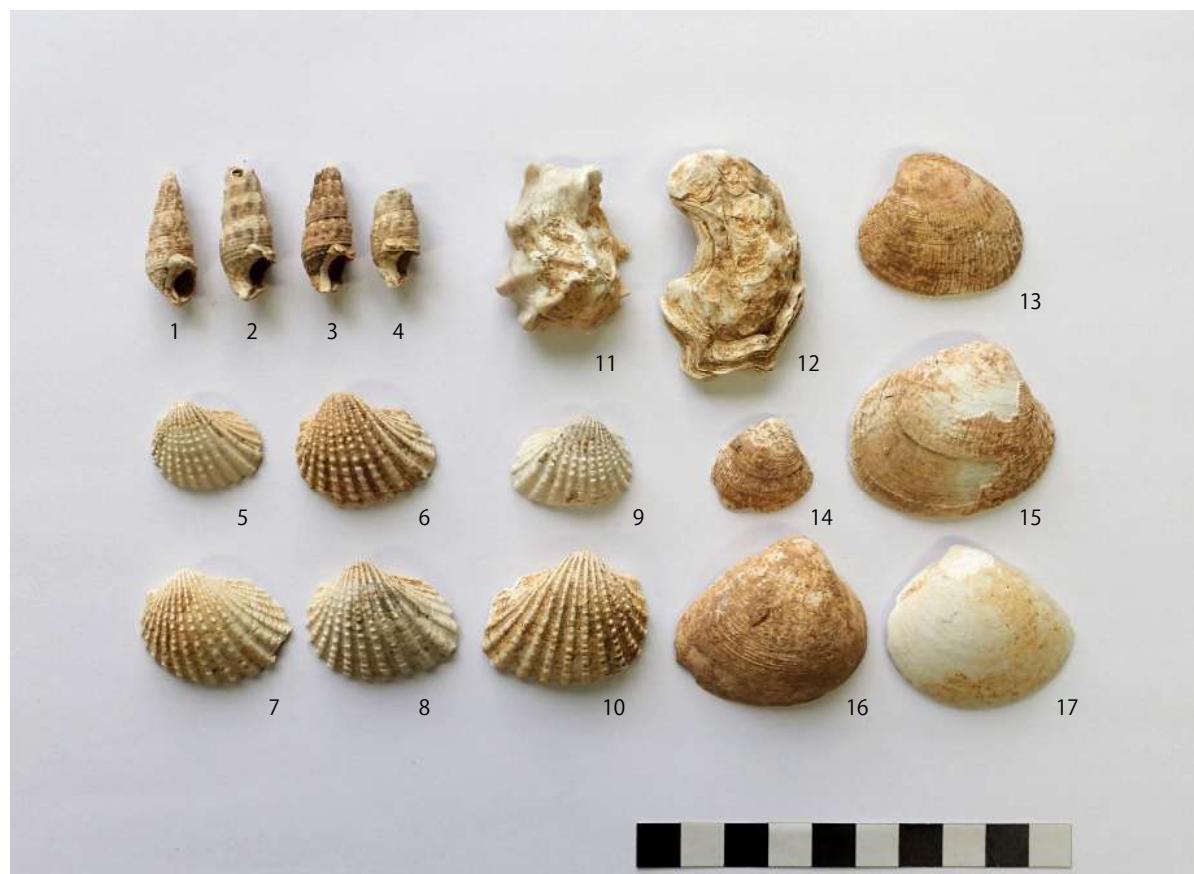
海土路貝塚採集貝類調査の機会と関連文献を提供いただいた岩国市文化財課に感謝申し上げます。

<sup>1)</sup>『郷土岩国のあゆみ』（大岡1974）には、昭和37年ごろ海土路の中尾貝塚から陶器片が発見され、それは古墳時代を下るのではないかと記述されている。また、『岩国市史』には、昭和20年代に海土路・藤生・室木の一帯で発見された50か所におよぶ貝塚について、小野忠熙氏が「弥生式文化時代の後期から、古墳文化時代の前期にかけての遺跡と認定した」との記述がある（岩国市史編纂委員会1970）。

### 参考文献

- 岩国市史編纂委員会 1970 『岩国市史 上』 岩国市役所、p.67  
大岡 昇 1974 『郷土岩国のあゆみ』 岩国市立岩国図書館、pp.12-14

- 奥谷 喬司編著 2017『日本近海産貝類図鑑(第二版)』東海大学出版部  
神崎 前・藤田慎一 2016『中津居館跡Ⅱ』岩国市教育委員会、p.1  
黒住耐二 2021『くらべてわかる貝殻』山と渓谷社  
小宮 孟 2015『考古学研究調査ハンドブック⑤ 貝塚調査と動物考古学』同成社、pp.46-47  
福田 宏・増野和幸・杉村智幸 1992『概説 山口県の貝類』山口県立山口博物館  
逸見泰久ほか 2012『干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック』日本ベントス学会編、東海大学出版会



1 ウミニナ 2～4 イボウミニナ 5～8 ハイガイ左殻 9・10 ハイガイ右殻 11 マガキ左殻 12 マガキ右殻  
13 アサリ左殻 14・15 アサリ右殻 16 シオフキ右殻 17 ハマグリ左殻 [スケール 100mm (1 目盛り 10mm)]

写真 海土路貝塚（中尾貝塚）出土貝類